

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の基本構造編

【第2回】前置詞編

前回の講義では文の成分と基本構造の話をしたけど、ちゃんとマスターできたかな？
今回はそれを踏まえて、もう少し文の修飾成分に踏み込んだ話をするぞ。

まずは漢文理解の鍵になる前置詞と前置詞句の働きだ。

1. 前置詞と前置詞句

前置詞というのは、中国では介詞^{かいし}といって、仲介をする語のことをいうんだ。
何を仲介するかって？ それはある語と述語を仲介して結びつける働きさ。

たとえば日本語で「庭」という語と「歌う」という語を「で」という助詞が結びつけて「庭で歌う」って
いうだろ？

この「で」のおかげで「歌う」という動作の行われる場所が「庭」なんだとわかるよね。
これと似たような働きをするのが前置詞さ。

ただし、古典中国語の前置詞と日本語の助詞とは違うぞ。

もともとのなりたちが全く違うんだ。

前置詞には色々あるけど、もとはすべて動詞、ちゃんと具体的な意味をもっている動詞だったんだ。

たとえば、代表的な前置詞には「於」「以」「与」があるけど、それぞれ「ある」「用いる」「仲間になる」という意味の動詞だった。

それが具体的な意味を失って形式的な意味のみを表すようになった。それが前置詞だ。

つまりもはや前置詞単体では具体的な意味が表せなくて、後に目的語をとって初めて実質的な意味が補われるわけだ。

たとえば、「於」だけでは形式的な働きしかないけど、後に「庭」という目的語をとって「於庭」の形をとることで、「庭（という場所）にある」という意味になる。

「以棒」なら「棒を用いる」、「与太郎」なら「太郎とともにする」という意味になるわけだ。

これが述語の前に置かれると、

「庭ですることとして」↓「庭で」

「棒を用いることとして」↓「棒で」

「太郎とともにすることとして」↓「太郎と」

という意味を表して述語を修飾するし、述語の後に置かれれば、「庭でする」「棒を用いる」「太郎ととも

にする」という依拠性を述語に補うことになる。

「歌_二於_レ庭_一」なら、「歌_二於_レ庭_一」(歌うこと庭でする)なんだが、それは「庭で歌う」ってことだから、「歌_二於_レ庭_一」と読む。

「歌」だけでも、文としては成立するけど、後に「於_レ庭」(庭にあつてゐる)を置くことで、「歌う」という行為が何に(どこに)依存するかという依拠性を補うことになるんだよ。
わかったかな？

日本語の助詞の場合、「庭で」とか「庭に」は、単体では独立して働き得ない。
でも、「於_レ庭」は、もともとが動詞だから、「庭に於てする」という働きがある。
そこが決定的に違うところなんだ。わかったかな？

一般の古典中国語文法では、この「於_レ庭」を前置詞句という。
つまりもともと前置詞は他動詞だから、名詞を目的語にとって前置詞句をつくるわけだ。
これが1つのまとまりなんだ、だから句っていう。

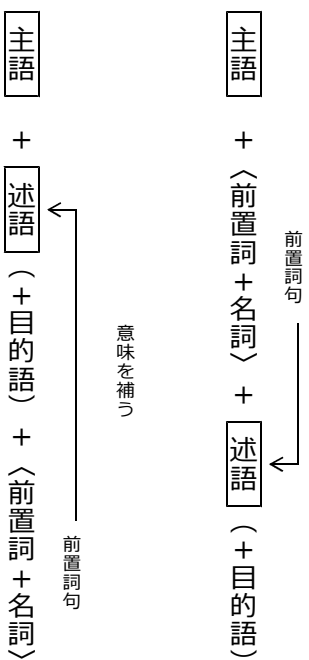
長々と説明したけど、結論としてこの前置詞句には述語を修飾する働きがある。

第1に述語の前、つまり副詞の位置に置いて述語を修飾する。

第2に、述語や述語構造(述語+目的語のことだよ！)の後に置いて述語に意味を補う。
その意味で、中国では述語の後に置かれる前置詞句を補語の働きとすることもあるんだ。
構造は違うけど、どちらも述語を修飾するという点では同様の働きというわけだな。

◎ポイント！…前置詞は名詞を目的語にとり前置詞句を構成する。述語の前に置かれた時は副詞のように連用修飾し、述語や述語構造の後に置かれた時は、補語として述語に意味を補充する。

・具体的には次の2つの形をとるが、どちらも述語を修飾する点では同じ。



2. 「於」前置詞句

さて、その前置詞が色々あるんだが、代表的なを紹介しよう。

まずは「**於**」前置詞句だ。

前にも言ったように、もともとは「ある」という意味の動詞だったんだが、それが前置詞になって「どこにある」という場所の意味を基本義として、対象や起点、比較や受身の対象など、他にも色々な意味と働きがある。

たとえば日本語で「君に」といっても、「君に教える」という場合もあれば、「君にだまされる」という場合もあるだろ？ 「君に勝る」ということもあるよな。

それに似て、前置詞句のもつ意味は述語との関係で決まるんだ。

主語	述語	前置詞句
漢王	戦	於彭城

▼漢王^{かんわう}彭城^{ほうじやう}に戦^{たたか}ふ。

▽漢王が彭城で戦う。

これは「於」前置詞句が**動作の行われる場所**を表してる。

「漢王は戦う（こと）彭城に於てする」だから、「彭城で戦う」という意味になるわけだ。
この意味なら「で」と訳せばいい。

この形は述語の後に前置詞句が置かれて、どの場所で戦うかという依拠性を述語「戦」に補充してるんだ。

思い出してほしいんだが、目的語を説明した時に、依拠性の目的語のところでは場所目的語（処所賓語）と
いうのがあったら？

ほら、この例だよ。

主語	述語	目的語
将軍	戦	河北

▼将軍^{しやうぐん}は河北^{かほく}に戦^{たたか}ふ。

▽将軍は黄河の北で戦う。

「将軍が戦う」という行為が、「河北」という場所をよりどころにしてるわけだから、「河北」は依拠性の目的語だって言ったよな？

この文とさっきの例を見比べてみてほしいんだ。

「於」があるかないかだけの違いだろ？

ということは、つまり、この文は「將軍^ハ戰^リ於^リ河北^ニ」と書き換えることができるんだよね。

そして、これがどういふことかというところ、述語「戰^リ」の依拠性を明確にするために、前置詞「於」を置いたわけ。

あえて「戦ふこと河北に於てす」とでも読んでみれば、「於」が「於河北」の形で、「戦^リ」に依拠性を補っていることがよくわかるだろう？

ところで、さっきの例は、理論的には前置詞句を述語の前、つまり副詞の位置に置いて次のように表現することもできるんだぜ。

主語

前置詞句

述語

漢王^ハ於^リ彭城^ニ戰^リ。

▼漢王^{かんわうはうじやう}彭城^{おひ}に於^たて戦^かふ。

どちらも表す意味自体は同じだよ。

「彭城」という場所ですることとして戦う」だから、「彭城で戦う」という意味になる。

いわばこの前置詞句は副詞の位置に置かれて、副詞と同じように述語「戦^リ」を修飾するんだ。

ただな、注意しなきゃならんのは、読み方だ。

訓読する（つまり、日本語に訳す）上では、「於」前置詞句が述語の前で用いられる時は「おいで」と読んで、後で用いられる時は置き字扱い、つまり読まないんだ。

ちなみに、「於」前置詞句が場所を表す場合は、述語や述語構造の後に置かれるのがほとんどで、例がないわけではないけど、右のように述語の前に置かれるのはかなり少ないね。

主語

述語

前置詞句

日出^ひ出^で於^リ東^ニ。

▼日出^ひ東^{ひがし}より出^いづ。

▽太陽は東から出る。

「出づること東に於てす」から、「東から出る」という意味を表す。

この例の場合は、動作行為の行われる起点がどこかという依拠性を述語「出^で」に補充するんだよ。

「ヨリ」と読んで、「くから」って訳せばいいね。

主語 述語 前置詞句
夫子至_ニ於_レ是邦_ニ。

▼夫子是の邦に至る。
▽先生がこの国に来る。

これは「於」前置詞句が、述語「至」の到達点がどこかという依拠性を補充する。
「く」って訳そう。

「於」の働きはまだまだあるぞ。

述語 目的語 前置詞句 述語 目的語 前置詞句
始_メ得_ニ名_ヲ於_レ文章_ニ、終_ニ得_ニ罪_ヲ於_レ文章_ニ。

▼始め名を文章に得、終に罪を文章に得。

▽最初（自分の）文章のおかげで名を挙げ、最後には文章のせいで罪を得た。

これは動作行為が発生、出現する原因を表す。

「名を得る」のも「罪を得る」のも、「文章」によるのだという依拠性を述語「得」に補充するんだよ。
「くにより」とか「くのせいで」って訳すとぴたつとはまるかな。

主語 述語 前置詞句
江乙説_シ於_レ安陵君_ニ。

▼江乙安陵君に説く。

▽江乙が安陵君に説いた。

「於」前置詞句が動作行為の対象を表す例だ。
「く」とか「くに対して」って訳すといいぞ。

主語 述語 前置詞句
陳侯殺_ス於_レ夏氏_ニ。

▼陳侯夏氏に殺さる。

▽陳侯が夏氏に殺された。

この「於」前置詞句は**受身の対象**を表してる。

述語「殺」は受動態「殺^{サル}」になっていて、陳侯が誰に殺されるのかという依拠性を「殺^{サル}」に補充してるんだ。

「く」と訳せばいいな。

この用法の時は述語に送り仮名「る・らる」をつけて受身であることがわかるように読むんだよ。
ん？「る」と「らる」のどっちをつけるんだって？

おいおい、それは漢文の問題じゃない、日本の古典文法の問題だよ。

四段活用動詞として読む語にはその未然形に「る」、それ以外は「らる」だよ。

ちなみに、日本語の助動詞「る」はラ変動詞、ナ変動詞の未然形にもつくけど、漢文訓読ではふつうナ変「死ぬ」「往ぬ」は使わない。

「死」は「死す」（サ変）、「往」は「往く」って読むからね。

それに、ラ変動詞として読む「有」（有り）、「居」（居り）が受身になることはないだろう？
だから、四段活用動詞として読む漢字だけ、受身の場合「る」をつけると思ってるやいい。

「殺す」は四段活用だろ？ だからその未然形「殺さ」に「る」をつけて、「殺さる」と読む。
「殺さる」とか「殺せらる」とか読むな。

しっかり古典文法復習しとけよ。

主語

述語

前置詞句（補語）

季氏富^ムへ於周公^{コモ}く。

▼季氏周公よりも富む。

▽季氏は周公よりも富んでいた。

最後の例は**比較の対象**だ。

「富」は「とム」って読んでるけど、古典中国語では形容詞だぜ。

そもそも形容詞には「くである」という本性とは別に「よりくである」という比較態を副性としてもつんだ。

たとえばさ、「空が青い」と「今日の空は青い」の「青い」は違うんだよ。

え？どう違うのかって？

「空が青い」は本性の「青い」だけど、「今日の空は青い」は、昨日の空などと比較して「より青い」という比較態なんだよ。

本性の場合は、「何より」という比較の対象を別に必要とはしないけど、副性の場合は、「何より」を必要とする場合があるんだ。

そりゃ比較だからな。

その比較のよりどころ、すなわち依拠性を補うのが「於」前置詞句というわけ。

だから、「於」前置詞句が比較の対象を表す時は、「より」と読む。
比較つてのは「よりもどうだ」という意味を表すから、普通は述語が形容詞になる。

それと、受身の対象や比較の対象を表す時は、「於」前置詞句は必ず述語や述語構造の後に置かれて、述語の前に置かれることはないことも知つてほしい。

と、まあ、こんなふうな「於」前置詞句の意味と用法は実に多岐にわたるんだ。

つまり最初から決まってるんじゃない、述語と前置詞の目的語との関係はどう仲介するかを考えないと、意味は決まらないんだぜ。

◎ポイント! : 「於」前置詞句は次の形をとる。

主語	+	〈於+名詞〉	+	述語	(+目的語)	:	「於」は「おいデ」と読む
主語	+	述語	(+目的語)	+	〈於+名詞〉	:	「於」は置き字。読まない。

・「於」前置詞句の意味

- ① 場所 (ゝで「どうする」)
- ② 起点 (ゝから「どうする」)
- ③ 到達点 (ゝに「どうする」)
- ④ 原因 (ゝにより・ゝのせいで「どうする」)
- ⑤ 対象 (ゝに・ゝに対して「どうする」)
- ⑥ 受身 (ゝに「どうされる」)
- ⑦ 比較 (ゝよりも「どんなだ」)

3. 「以」前置詞句

「以」前置詞句もよく使われるから要注意。

前にも説明したように、この「以」はもともと「用いる」という具体的な意味のある動詞だったんだ。その意味が薄らいで(＝虚化して)形式的な意味だけを表すのが前置詞だね。

だから、後に名詞をとって「以」前置詞句を構成して、はじめて具体的な意味がもつんだ。

「以」棒^デなら「棒で」というふうにな。

そこから手段以外にも理由だとか、状態だとか、いろいろな意味を表すようになったんだよ。

ところで、「以」前置詞句も、述語の前、述語や述語構造の後の両方で用いられる。
述語の前に置かれた時は「くを以て」と読む。

ところが、**述語や述語構造の後に置かれた時は「くを以てす」とサ変動詞として読むんだ。**
ちよつと難しいんで、読み方にも注意が必要だな。

前置詞句	述語	目的語
〈以 _レ 杖 _ヲ 〉叩 _キ 其 _レ 脛 _ヲ 。		

▼杖_{ツヱ}を以_{もつ}て其_その脛_{はぎ}を叩_{たた}く。

▽杖でそのすねをたたく。

これが一番ポピュラーな用法。

動作行為の手段を表す。

「杖を用いることとして叩く」から、「杖で叩く」という意味になる。
つまり、「くで」とか「くを用いて」と訳せばいい。

いいかい？「以」前置詞句は述語「叩_ツ」を副詞のように連用修飾してるんだぞ。

この例を、「以」前置詞句を述語構造の後に置いて書き直すと、次のようになる。

述語	目的語	前置詞句(補語)
叩 _ツ 其 _レ 脛 _ヲ 〈以 _レ 杖 _ヲ 〉。		

▼其_その脛_{はぎ}を叩_{たた}くに杖_{ツヱ}を以_{もつ}てす。

この場合も文の意味自体は変わらないぞ。

「そのすねをたたく(こと)杖を用いてする」が本来で、「以杖」は、「叩_ツ其_レ脛_ヲ」という行為が何に依存するかという依拠性を補う構造なんだよ。

だから、述語の前に置かれた時と、表す意味自体は同じだと考えていい。

ただ、さつきも言ったように、前に置く時とは「以」の読み方が変わるんだ。

「…するにくを以てす」と読む。

「其の脛を叩く杖を以て」では文が終わらないからな、「以て」に「す」をつけてサ変動詞にしちゃったわけ。

そして、「くするにーを以てす」という読み方を作り出して、日本語として通るように読んだんだ。
これはなかなかうまい読み方だね。

主語 前置詞句 述語
吾^レ以^テ捕^ル蛇^ヲ独^リ存^ス。

▼吾蛇を捕ふるを以て独り存す。

▽私は蛇を捕らえること（＝仕事）によりひとり生き残っている。

この例は**動作行為の原因・理由**を表してる。

「を理由に」とか「のせいで」「により」とか訳せばいい。

単純に「で」と訳すこともあるな。

この用法の時は、例のように述語の前に置かれて、あまり補語の位置には置かれなみたいだね。

主語 前置詞句 述語
文^レ以^テ五^ニ月^ニ五^ニ日^ニ生^ル。

▼文五月五日を以て生まる。

▽文は五月五日に生まれた。

これは、**動作行為が行われる、発生する時**を表す。

「に」と訳せばいい。

前置詞句 述語 目的語
以^テ臣^ヲ弑^ス君^ヲ。

▼臣を以て君を弑す。

▽臣下でありながら主君を殺す。

これは、**動作行為を行う際の立場・身分**を表して、「で」「ででありながら」なんて訳す。

ちなみに、この「弑」は漢文頻出の語だよ。

「殺」と違って、自分の親とか主君を殺す時に使うんだ。

右の例なら下克上だぜ。

「弑逆」なんてこともあるよな？

前置詞句 述語 目的語
以^ニ其^ノ言^ヲ告^ル后^ニ。

▼其の言を以て后に告ぐ。

▽そのことばを皇后に告げる。

この例の場合は**動作行為の対象**を表してる。
「くを」と訳せばいい。

この対象の用法にはよく用いられる形があつて、次の形をとることが多いんだ。

以^テ A 為^ス B^ト。

▼ Aを以てBと為す。

▽① AをBとする。

② AをBとみなす。

③ AをBと思う。

前置詞句 述語 目的語
〈以^テ 布^ヲ〉為^ス 将^ト。

▼布^ヲを以て将^トと為^ス。

▽布（人名）を將軍にする。

これがその例。

「以^テ A 為^ス B^ト」の形は、「為^ス」を日本語にどう訳すかに、けっこう幅があるから要注意だぜ。

単純に「する」と訳せばいい場合、「みなす」と訳した方がこなれた訳になる場合、はたまた「思う」と訳した方がいい場合と、いろいろある。

たとえば、「以^テ 太郎^ヲ 為^ス 賢^ト」の場合、「太郎を賢いとする」がいいか、「太郎を賢いとみなす」がいいか、「太郎を賢いと思う」がいいか、どれがいい？

文脈に照らして、いちばん自然な訳を考えよう。

ところで、この形が、Aが省略されると、「以^テ 為^ス B^ト」になるが、③の意味で用いられている時に限つて、「以^テ 為^ス B^ト」（思うことにはBである）と読むことがある。

これがまた入試で、実によく読み方を聞かれるんだ。

ぜひ覚えておこう。

◎ポイント…「以」前置詞句は次の形をとる。

主語	＋〈以＋名詞〉＋	述語	（＋目的語）	…「以」は「もつて」と読む
主語	＋	述語	（＋目的語）＋〈以＋名詞〉	…「以」は「もつてス」と読む。

・「以」前置詞句の意味

- ①手段（～で・～を用いて「どうする」）
- ②原因・理由（～を理由に・～のせいで・～で「どうする」）
- ③時（～に「どうする」）
- ④立場・身分（～で・～でありながら「どうする」）
- ⑤対象（～を「どうする」・～に「どうする」）

4. 「為」前置詞句

3つめの前置詞句は「為」前置詞句だ。

こいつは述語の前でしか用いられないんで簡単なようだが、意外と意味が難しいんだ。

「ために」と読むから、どうしてもそれに引きずられて、「～のために」と訳してしまいがち。ところが、そういう意味ではないこともあるから気をつけなきゃいけない。

え？「為」はもともとどういう意味の動詞だったのだったって？

うくん、実ははつきりしないところがあるんだけど、2系統ある原義のうちの1つ、「人が象を使役して労働を助ける」の「助ける」の意味から前置詞の多くの意味が派生したと考えられるんだ。

で、読み方だが、「為」の形で、「～のために」「～がために」の二つの読み方がある。

普通、名詞を目的語にとった時は「～のために」と読んで、動詞の場合「～スルがために」と読むんだが、名詞でも「為」我」なんかは「我が為に」、「為之」は「之が為に」と読むから要注意だよ。

主語	前置詞句	述語	目的語
昭王	為	隗	改築宮。

▼昭王隗の為に宮を改築す。

▽昭王は郭隗のために宮殿を改築した。

これは動作行為が利益を与える関係を表すから、「～のために」って訳せばいい。

これは簡単。

この前置詞句も述語「改築」を連用修飾してる。
確認しとけよ。

前置詞句 述語
皆へ為_レ利_ニ来_ル。

▼皆利の為に来たる。

▽みな利益のために来る。

これは動作行為の目的を表してる。

「くのために」と訳してるが、あくまで目的であって、利益を与える関係とは違うぞ。

「利益を目的に」ってことさ。

「為」のこの意味は、「為」という字のもう1つの系統の原義「象を調教する」からの「仕事とする・服務とする」から生まれたという話だ。

それにしてもさ、漢文にもこんな情けない例があるってことは、いつの時代も人間は利益で動くわけだ、嫌な話だよなあ…

主語 前置詞句 述語
淮陰人へ為_ニ余_ニ言_フ。

▼淮陰の人余の為に言ふ。

▽淮陰の人は私に言った。

これは動作の対象を表してる。

「く」って意味だよ。

これなんかは、下手すると「私のために言ってくれた」なんて誤解しそうだが、別に「私のためになるから言ってくれた」んじゃないかって、単に「私に言った」ってことなんだ。

主語 前置詞句 述部
睢水へ為_ニ之_ガ不_レ流_ル。

▼睢水之が為に流れず。

▽睢水はそのために流れなくなつた。

これは**動作行為の原因・理由**を表してる。

「ゝのために」とか「ゝのせいで」と訳せばいい。

ここの「之」は「漢の兵士十数万人が睢水に入ったこと」を指してて、そりゃそんだけ入ったら川の流れも止まるわな。

「為」前置詞句の働きはだいたいこんなもんだけど、この前置詞句はよく省略された形で用いられる。

A 為 _レ B C。ス	(A 為 _レ B C。ナリ)
B が省略 ↓	A 為 _レ C。ス
	(A 為 _レ C。ナリ)
C が省略 ↓	A 為 _レ B。 (A 為 _レ B。ナリ)

たとえば、

人_ハ為_レ己_ノ学_フ。

▼人_{ヒト}は己_{オノレ}の為_{ため}に学_{まな}ぶ。

▽人は自分のために学ぶ。

という文章の場合、「己」が省略されると、

人_ハ為_ニ学_フ。

▼人_{ヒト}は為_{ため}に学_{まな}ぶ。

となる。

これは前後の文脈から誰のために学ぶのかがわかっている時、省略されるんだ。

また、述語が「学_フ」だつてことがわかりきってる時は、それを省略して、次のようになる。

人_ハ為_ニ己_ノ。 ▼人_{ヒト}は己_{オノレ}の為_{ため}にす。

こういう場合、さすがに「人は己^{ため}の為」で終わるわけにいかんじゃないか！
だから、昔の日本人は「ためニス」ってサ変動詞にして読んだわけ。
すごいよねえ。

前の「以」の時も補語の位置に置かれた時は「くヲもつテス」って読んでたろ？
これも同じ工夫だね。

ところで、この例のように、前置詞句が本来修飾すべき述語が省略されてるときは、語法的には前置詞「為」自体を述語とみなして、主語「人」＋述語「為」＋目的語「己」の構造だと考えるんだ。

でないと、構造的に述語のない中途半端な文になっちゃうからね。

でも、成分の呼び名を覚えて説明してるだけだから、混乱しなくていい。

面倒な場合は、そのまま述語の省略って理解しても、何の問題もないんだよ。

◎ポイント！…「為」前置詞句は次の形をとる。

主語 ＋〈為＋名詞〉＋ **述語**（＋目的語） …「くノ為ニ」と読む場合と「くガ為ニ」

と読む場合がある。

・「為」前置詞句の意味

- ①利益（くのために「どうする」）
- ②目的（くのために「どうする」）
- ③対象（く「どうする」）
- ④代替（く「代わって」で「どうする」）
- ⑤原因・理由（くのために「どうする」）

5. 「從」前置詞句・「自」前置詞句

「從」前置詞句と「自」前置詞句は、どちらも通常は「くより」と読んで、主に起点を表すんだ。
まず、「自」は鼻の象形文字さ。

君らも自分を示す時には鼻を指すだろ？

だから「自」は自分を意味するようになったという説があるんだよ。

つまり自分を基本とするところから起点を表すようになったといわれてる。

「從」は、だれかに「つきしたがう」が原義。

そこから転じて、どこから、いつから従うのか、あるいは何に従う、つまり何に基づいてなどの意味を表すようになったんだ。

前置詞の起点の意味もそこから生まれたんだね。

ただし、同じ起点を表すといっても、「**從**」と「**自**」では少し違ふところがあつて、「**從**」前置詞句は述語の前にしか置かれなけれど、「**自**」前置詞句は述語の前にも、述語や述語構造の後にも置かれるという違いがある。

前置詞句

述語 目的語

〈**自**、**古**〉**皆**、**有**、**死**。

▼**古**より**皆**死**有**り。

▽昔から誰でも死がある。

これは**時**の**起点**を表してる。

「くから」って意味だな。

前置詞句「**自**、**古**」が、述語「**有**」を連用修飾する形で用いられてるんだ。

ところが、次のような形もあるんだぞ。

述語

前置詞句 (補語)

始、〈**自**、**秦**、**世**〉。

▼**秦**の**世**より**始**まる。

▽秦の時代から始まる。

同じ時の起点を表してるが、今度は述語の後、つまり補語として前置詞句が置かれて、述語「**始**」を後置修飾してるんだ。

こういう構造をどう考えるんだったか覚えてるかい？

述語の後に置かれる「**於**」前置詞句が、述語の依拠性を明確にする働きがあつたら？

これも同じだよ、「**始**」って動作が、いつを起点とするかという依拠性を「**自**、**秦**、**世**」が補ってるんだ。依拠性がわかるようにあえて読めば、「始まること秦の世よりす」だな…

でも、実際にはそうは読まない、「**自**」前置詞句は述語の前でも後でも読み方は変わらないのが特徴かな。

ところで、よく「**出自**による差別」とか「**出自**を問わない」とか言うだろう？

この「**出自**」って、「**出**どころ」とか「その人の生まれ」って意味で使うんだけど、もともとは「**出**、**自**」(くから出る)の形の始めの二字なんだよ。

なるほどなあ…って思つたろ？

〈從_二七月_一至_二十月_一。〉

▼七月_一より十月_一に至る。

▽七月から十月に至る。

「從」前置詞句も**時の起点**を表して、「より」と読んで、「から」って訳す。「自」前置詞句と違って、補語の位置には置かれない。

主語

前置詞句

述語

君_一〈自_二故郷_一来_二。〉

▼君_一故郷より来たる。

▽君はふるさとから来た。

今度は**場所の起点**を表してる。

これも「から」と訳せばいい。

これも、前置詞句を補語の位置に置いて、

君_一来_二〈自_二故郷_一〉。

と表現することが可能だ。

どっちの場合も前置詞「自」は「より」って読むんだ。

前置詞句

述語

王_一必_二欲_一致_二士_一先_二〈從_二隗_一始_二。〉

▼王_一必_二士_一を致さんと欲せば、先_二隗_一より始めよ。

▽王がどうしても人物を招こうとお思いなら、まず隗（＝私）からお始め下さい。

起点は時や場所だけじゃないぞ、今度は**順序の起点**だ。

これも「から」と訳せばいい。

この「隗より始めよ」ってのは、有名な言葉だぞ。

中国は戦国時代に燕^{えん}の昭王^{しやうわう}つて王様がいてな、有能な人材を集めるにはどうしたらいいかって郭隗^{かくゐ}に相談したんだ。

そしたら、その郭隗が言うには、昔、1日に千里も走る名馬がほしいと思った人がいたんだそう。なかなかしてもほしいから、使用人を買ってこいと千金もの大金を渡して探させると、こともあるうにその使用人、死んだ名馬の骨を半額の五百金で買って帰ってきた。そりゃ、怒るわな。

ところがその使用人は自信满满で、「死んだ馬の骨でさえ買ったんですから、生きた名馬ならもっと高く買ってもらえるって、今に千里の馬つれて飼いまがやってきますよ。」なんて答える。

ほんまかいな！と思ってたら、1年も経たないうちに3頭も千里の馬が現れたってんだから驚きだ。その話を踏まえて郭隗が言うんだ。

「王様がもしも有能な人材をお探しなら、まず隗から始めてください。」

つまり、私を賢者として優遇することから始めてくださいってことさ。

「私程度の奴でさえ優遇されるなら、俺もつと能力あるし！って思う人がどんどん現れますよ。」って。で、首尾よく有能な人材がどんどん燕の国に集まったっていうから、めでたしめでたし。

「隗より始めよ」って言葉は、でっかい物事をなしとげるには、まず身近なところから着手しなさいって意味で用いられるんだが、その後意味がちよつと変わって、今では言い出しっぺから始めるよって意味でも使われるようになった。

有名な言葉だから覚えとけよ。

前置詞句

述語 目的語

〈自^リ此^レ觀^ル之^ハ、国^ノ之^ハ所以^ニ重^シ、主^ノ之^ハ所以^ニ尊^ブ者^ハ、力^カ也^{ナリ}。

▼此^{コレ}より之^{これ}を觀^みれば、国^{くに}の重^{おも}んずる所以^{ゆゑん}、主^{しゅ}の尊^{たふと}ぶ所以^{ゆゑん}の者^{もの}は、力^{ちから}なり。

▽このことからこれを判断すると、国が重んじるもの、君主が尊ぶものは、力である。

ちよいと長い例文だが、ここでは**動作行為の根拠**を表してる。

「くから」と訳してもいいし、「くに基づいて」と訳すのもありだ。

前置詞句

述語 目的語

前置詞句

述語 目的語

〈從^リ少^シ正^ス長^ヲ、從^リ賤^シ治^ム貴^ヲ。

▼少^{せう}より長^{ちやう}を正^{ただ}し、賤^{せん}より貴^きを治^{をさ}む。

▽年少から年長を正し、身分の低いものから身分の高いものを治める。

最後は、**動作行為の主体**を表す例だ。

これも「くから」と訳せばいいが、「正」「治」の主体はそれぞれ「少」（年少の者）、「賤」（身分の低い者）だ。

ただし、構造的には「從」少」「從」賤」はあくまで前置詞句で、主語じゃないぞ。

この文は要するに無主語文なんだ。

この例は、年少者や身分の低い立場から、年長者や身分の高い人を指図して従わせるのは、支配できる権力がなければ無理だよってことを言った文の一節だよ。

さて、前置詞句は述語を修飾する働きがあるのは前に述べたけど、他の前置詞句でもそうであるように、「自」前置詞句の場合も、前後の文脈から述語がわかりきっている時には、述語が省略されることがある。その場合は「為」前置詞句と同じで、前置詞句自体を述部とみなすんだよ。

主語

前置詞句（＝述部）

書伝礼記、**自**孔氏。

▼書伝礼記は、孔氏よりす。

▽書伝や礼の記録は、孔氏から始まった。

この文は、たとえば「書伝礼記、**自**孔氏始」だったら、「**自**孔氏」は前置詞句なんだが、右の例文はその修飾すべき述語「始」がないだろう？

だから、主語「書伝礼記」＋述語「**自**」＋目的語「孔氏」の構造だと考えるんだ。

つまり「**自**孔氏」を述部とみなすってことさ。

そして、「**自**」前置詞句自体が述部になる時は、まさか「**自**」で文を終わるわけにはいかないから、訓読でも「**自**りす」とサ変動詞で読むことも覚えておこう。

このあたりも、昔の日本人はうまく読んだもんだねえ… 尊敬しちゃうよ。

◎ポイント…「從」前置詞句・「自」前置詞句は次の形をとる。

主語	＋〈從＋名詞〉＋	述語	（＋目的語）	…「從」前置詞は補語の位置には置かれな
				い。

主語	＋〈自＋名詞〉＋	述語	（＋目的語）	…「自」前置詞句は、述語の前に置かれて
主語	＋	述語	（＋目的語）＋〈自＋名詞〉	も、補語の位置に置かれても「くより」と読む。

・「從」前置詞句・「自」前置詞句の意味

- ① 時の起点（～から）〔でつする〕（
- ② 場所の起点（～から）〔でつする〕（
- ③ 順序の起点（～から）〔でつする〕（
- ④ 根拠（～から・～に基づいて）〔でつする〕（
- ⑤ 行為の主体（～から）〔でつする〕（

6. 「与」前置詞句

参考書や問題集にはよく「与」の用法を並列と従属で説明してあるな。

でも、これは古典中国語では別の品詞に扱ってるものを、一緒にたに論じてるんだ。
別の品詞で扱ってことは、働きが違うってことだよな。

並列ってのは、たとえば「桃_ト与_ト栗」（桃と栗）みたいに、英語でいう「and」に近い意味で用いられる
「与」の、接続詞の用法のひとつだ。

一方、従属ってのは、いわば「with」みたいな意味で、古典中国語の語法では前置詞なんだな。
働きが違うのがわかるよね。

前置詞句の最後はこの「与」前置詞句を取り上げよう。

ところで、「与」の字は、「複数の人が仲間になる」というのが原義なんだ。
そこから「一緒にゝする」という意味の前置詞になったんだね。

え？ じゃあ、接続詞の「桃_ト与_ト栗」の方は？ って？ いやあ、君たちどんどん学ぶ姿勢がよくなっ
てるねえ。

わからんことはどんどん聞けよ。

「桃_ト与_ト栗」は「桃と栗」という意味だけど、「栗と桃」とは違うんだ。

へ？ って顔してるな。

「与」は「仲間になる」ってのが原義だったけど、それは「仲間にする」ということでもあるだろ？

だから、「桃_ト与_ト栗」は、「桃と、それと仲間にする栗」ってことだよ、「栗と、それと仲間にする
桃」じゃないんだ。

つまり、「桃_ト与_ト栗」の本来の重点は桃に置かれてるんだね。

栗は桃に付け加えられたものだったんだよ、もともとはね。

そういう意味では、これから説明する前置詞「与」の用法も、根は同じってことになるんだ。

「与」前置詞句の基本的な構造は次の形をとる。

主語 前置詞句 述語
A 〈与_と B〉 C_{。ス}

▼ A 〈B と〉 C する。

▽ A が 〈B と〉 C する。

前置詞句「与_と B」は、述語Cを連用修飾するんだけど、あくまで主語Aに対して付け加えられる存在なんだ。

だから、「太郎与花子歌」の場合、理屈の上では「太郎与_と花子歌」(太郎が花子と歌う)と、「太郎与_と花子歌」(太郎と花子が歌う)の2つの解釈が成り立つけど、これは結局のところ同じことなんだな。

前の方が従属、後の方が並列って、教科書や参考書には書いてあるだろ？

学校の先生もそう教えるよね。

だったらどうやって区別するんだい？さっきの例は。

ためぐち先生はこう思うんだ、いわゆる並列の形「太郎与_と花子歌」であっても、それは「太郎と、それと仲間にする花子が、歌う」ってね。

それはつまり「太郎が花子と歌う」と、ほとんど変わらないだろ？

並列であっても、重点は「太郎」に置かれてるんだよ。

さっき、根は同じって言ったのは、そういうことさ。

さて、さっそく用例を見ていこう。

主語 前置詞句 述語
梁_{リョウ} 〈与_と 籍_{セキ}〉 俱_ニ 観_ミ。

▼ 梁_{リョウ} 籍_{セキ} と 俱_ニ に 観_ミ する。

▽ 項梁は項籍と共に(秦の始皇帝の行列を) 見た。

ここで「与」前置詞句は、**動作行為を共にする相手**を表してる。

「と」って意味だよ。

この例文のように副詞「俱_ニ」と共に用いられて、述語を修飾することが多いんだ。

いいかい？「与」が「と」、「俱_ニ」が「共に・一緒に」って意味だ。

ところでこの例文、項籍ってのはあの項羽のことなんだが、始皇帝の行列を見て、このあと「あいつ、取

って代わってやる！」って項羽は言うんだぜ。

おじさんの項梁が慌てて「ばかなこと言うな！一族皆殺しにされるぞ！」ってたしなめるんだが、心の中では「こいつ、見どころがあるな…」って思うんだ。

一方で沛公、つまり劉邦が同様に始皇帝の行列を見て、「一人前の男子なら、あんなふうになつてみたいぜ！」と言うのと、実に対照的だよ。

項羽と劉邦の史話はほんとおもしろいから、じっくり読んでみな。

さて、脱線しちゃったが、「与」前置詞句の話に戻ろう。

この形、いろんな語が省略されることがあるんだ。

たとえば、今の例文で「俱」を伴わず、なおかつ前置詞の目的語「籍」が省略されちゃうと、

梁^{リョウ}へ^ニ与^ニ俱^ニ観^ル。

▼梁^{リョウ}与^ニに^ニ観^ル。

こんなふうになっちゃう。

もちろん文脈で誰と行為を共にしてるのかわかつてる場合だけ。

これ、本当は「与」は「と」って意味だから、原文に忠実に訳せば「彼と」ぐらいの意味になる。でも、訓読で「と」と読むわけにいかないよな。

だって、「梁と観る」と読んだら、「誰かが梁と観る」の意味になって、誤解されちゃう。

そもそも日本語の「と」は付属語なんだから、自立語と共に用いなければ意味をなさない。

そこで訓読の工夫として、この場合は「与」を「とも」と読むことにしたんだ。

そう読んだ以上、「共に」と訳してもしかたないよね。

でも、これも訓読の工夫なんだ。

次にこの形が「俱」を伴う場合。

梁^{リョウ}へ^ニ与^ニ俱^ニ観^ル。

▼梁^{リョウ}与^ニ俱^ニに^ニ観^ル。

今度は「与俱」を「とも」と読んで。

「与」を「と」と読むわけにいかないのは、前と同じ事情だな。

人によっては、「与俱」と繰り返し読むこともある。

だからといって「一緒に一緒に」なんて馬鹿な訳をするなよ。
ほんとは「彼と共に」って意味なのを、しかたなくこう読んでるんだから。

さらにこの例から述語「観」を省略しちゃつとどうなるか？
もうだいたいは想像つくんじゃない？

梁へ与へ俱。

▼梁与俱にす。

述語が省略された時は、どうするんだっけ？ そうそう、前置詞をサ変動詞で読むんだ。
だから、「与俱にす」と読むで。

ここでは副詞「俱」も一緒に読むんだ。

語法的にも、「与俱」を述部ってみなす。

ちよいとややこしいけど、よく出てくる形だから、しっかり整理しとけよ。

◎ポイント！…動作を共にする相手を示す「与」前置詞句は次の形をとる。

主語 + へ与 + 名詞 + (俱) + 述語 (+ 目的語)

・「与」前置詞句の意味

①動作を共にする相手 (く)と「どうする」

・「A 与 B 俱 C。」の省略形は次の形をとる。

A 与 C。 … 「俱」を伴わず、B が省略された場合。

A 与 俱 C。 … B が省略された場合。

A 与 俱。 … B と述語が省略された場合。

さて、「与」前置詞句は、動作行為を共にする相手を示す以外の用法でも用いられる。
つまりいわゆる「従属」の用法だけじゃないんだ。

主語 前置詞句 述語

秦へ与へ晋へ戦。

▼秦晋と戦ふ。

▽秦の国が晋の国と戦った。

これは**行為の関与する対象**を表してる。

「〜と」と訳せばいいんだが、さっきの「動作を共にする相手」とは全然違う。

もしこれがいわゆる「従属」なら、秦は晋の国と共に、どっか別の国を相手に戦うことになっちゃう。

ここは秦が戦った相手そのものが晋だ。

だから、明らかに前の例とは違うね。

でも、これも「秦が、晋を戦争相手の仲間？として戦う」って考えれば、「仲間にする」から生まれる用法だってわかるな。

主語

前置詞句

述語

言語 **へ** **与** **二** **中国** **一** **同**。

▼**言語中国と同じ**。

▽（この異民族の）ことばは我が国と同じである。

今度は**比較の対象**だ。これも「〜と」と訳す。

あえて「与」の原義に照らせば、「言語が、中国を比較仲間として、同じ」ってことさ。

「**与** **A** **同**」とか「**与** **A** **異**」（Aと違う）、「**与** **A** **不同**」（Aと同じではない）とか、はたまに「**与** **A** **不異**」（Aと違わない）とか、色々あるぞ。

◎ポイント！…行為の関与する対象を表す「与」前置詞句は次の形をとる。

主語 + 〈与 + 名詞〉 + **述語**（+ 目的語）

・「与」前置詞句の意味

②行為の関与する対象（〜と・〜を相手に）〈どうする〉（

◎ポイント！…比較の対象対象を表す「与」前置詞句は次の形をとる。

主語 + 〈与 + 名詞〉 + **同**・**異**・**不同**・**不異**（

・「与」前置詞句の意味

③比較の対象（〜と）〈どうである〉（

7. その他の前置詞句

ここまで代表的な前置詞句を取り上げたが、前置詞には実は他にも色々あるんだ。
ずらっと並べてやろう。

・由（～二由リ）

①場所・時の起点（～から）

（例）由_リ文王_ニ至_ル於_ニ孔子_ニ、五百有余_ニ歳_{ナリ}。

▼文王より孔子に至る、五百有余歳なり。

▽文王から孔子に至るまでは、五百年あまりである。

②原因・理由（～によって・～のせいで）

（例）兵_ハ由_リ此_ニ起_ル。

▼兵は此に由り起こる。

▽戦争はこれによって（＝これが原因で）起きる。

③根拠・よりどころ（～により・～から）

（例）由_リ是_ニ觀_レ之_ニ、無_ニ惻隱_ノ之_心、非_ズ人_ニ也_{ナリ}。

▼是に由りて之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。

▽このことからこれを考えると、あわれみいたむ心がないものは、人ではないのだ。

・因（～二因リ）

①原因・理由（～によって・～のせいで）

（例）因_リ此_ニ怒_リ遣_{ハシ}人_ヲ追_{ヒテ}殺_{サシム}王_ノ姉_ヲ道_中ニ。

▼此の怒りに因り人を遣はし追ひて王の姉を道中に殺さしむ。

▽この怒りによって人を派遣して（趙）王の姉を追いかけて道で殺させた。

②根拠・よりどころ（～により・～から）

（例）因_リ能_ニ而_テ受_{ケル}禄_ヲ。

▼能に因りて禄を受く。

▽能力にもとづいて俸禄を授ける。

③機会（～の機会に・～に乗じて）

（例）因_レ其_レ無_レ備_ニ、卒_ニ然_ニ擊_レ之_ヲ。

▼其_レの備_ニへ無_レきに因_リて、卒_ニ然_ニとして之_ニを擊_ツ。

▽その備えがないことに乗じて、当然これを攻撃した。

④行為の発生する場所・経由（～から・～を通して）

（例）因_レ井_ニ中_ニ視_レ星_ヲ、所_レ視_ル不_レ過_ニ数_ニ星_ニ。

▼井_ニ中_ニより星_ヲを視_ミれば、視_ル所_ニ数_ニ星_ニを過_スぎず。

▽井戸の中から星を見れば、見るものは数個の星を上回らない。

⑤仲介・依頼（～を通して・～を頼って）

（例）徐_ニ無_ニ鬼_ニ因_レ女_ニ商_ニ見_ニ魏_ニ武_ニ侯_ニ。

▼徐_ニ無_ニ鬼_ニ女_ニ商_ニに因_リて魏_ニの武_ニ侯_ニに見_ミゆ。

▽徐無鬼（＝人名）が女商（＝人名）の紹介で魏の武侯にお目にかかった。

・用（～ヲ用テ）

①手段・よりどころ（～で・～によつて）

（例）齊_ニ氏_ニ用_レ戈_ヲ擊_ツ公_ニ孟_ニ。

▼齊_ニ氏_ニ戈_ヲを用_テて公_ニ孟_ニを擊_ツ。

▽齊氏がほこで公孟（＝人名）を斬りつけた。

②原因・理由（～で・～のために）

（例）用_レ是_ニ反_ニ怨_ニ王_ニ。

▼是_ニを用_テて反_ツつて王_ニを怨_ム。

▽このためかえって王様を怨んでいる。

③対象（～を）

（例）用_ニ其_ニ姉_ニ妻_ニ之_ヲ。

▼其_ニの姉_ニを用_テて之_ニに妻_ニあはす。

▽その姉を彼に嫁がせた。

・在（～に在リテ）↓動詞として訓読する。

①場所（～で・～において）

（例）臧武仲在_レ齊聞_レ之。

▼臧武仲齊に在りて之を聞く。

▽臧武仲は齊でこれを聞いた。

②時（～に・～の時に）

（例）在_レ定王六年秦人降_レ妖。

▼定王の六年に在りて、秦人妖を降す。

▽定王の六年に、秦の人が怪しげなことを言いふらした。

・対（～に對シテ）

①対象（～について・～に対して・～に向かって）

（例）對_レ其母泣_レ。

▼其の母に對して泣く。

▽その母に向かって泣く。

・当（～に當タリ・～に當タル）

①時（～に・ちようど～の時に）

（例）當_レ是之時秦晉為_レ疆國。

▼是の時に当たり、秦晉疆国たり。

▽この時、秦と晋は強国であつた。

②場所（～に・ちようど～の所に）

（例）委_レ肉當_レ餓虎之蹊。

▼肉を委して餓虎の蹊に当たる。

▽肉を飢えた虎のいる道に放り出しておく。

③対象（くに対して・くに向かつて）

（例）**当_レ此_ニ、天下_ノ之_ハ君子_ハ皆知_{リテ}而非_{トシ}之_ヲ、謂_フ之_ヲ不_レ義_ト。**

▼此_ニに_レ当_レたり、天下_ノの君子_ハは皆知_{リテ}りて之_ニを非_{トシ}とし、之_ニを不_レ義_トと謂_フふ。

▽これに対して、天下の君子は皆理解していてそれを非難し、これを人の道にはずれたことだという。

まあ、ほかにもあるんだが、こんなところが有名な前置詞かな。

一つひとつの意味は少しずつ覚えていけばいいが、用いられ方、つまり文のどの位置に置かれて、どういう修飾のしかたをするかはきちんと押さえておこう。

今日の講義はここまでだ。次は助動詞の学習をしよう。

前置詞と前置詞句、しっかり復習しとけよ。